

仙台大学通信教育指導室メールマガジン 第28号

通信教育指導室から、こんにちは。

授業名人の有田和正先生にも、自分の思いがなかなか伝わっていかない難敵がいます。それが今日登場するA君です。そのA君を「追究の鬼」に仕立て上げるべく、有田先生の悪戦苦闘が始まります。



有田和正先生

宿題は「試食すること」

● 子どもの事実をさぐり続けよ

「子どもの事実」をとらえ、これにのっとった授業をしなければ、子どもは生き生きと追究しない。いくらよい教材だといわれるものでも、子どもの実態にマッチしていなければ、よい教材とはいえない。

わたしは教材開発の原点は、常に一人の子ども、それも、学習にのってこない子どもを意欲的にしようと考えるところである。動かない、学習を面白がらない子どもを、面白がらせようと考えるところから出発する。難敵A君の登場である。

● A君を熱中させるネタ研究

わたしは、何としてもA君を熱中させたいと考えた。

A君は、給食の時間は、とても意欲的だ。食べることには強い興味を示す。このことを何とか使えないか、と考え続けた。

ある日、家の近くの店の前を通りかかったら、

「今日のメロンはおいしいよ。一切れ食べてごらん」

とさかんにすすめるのだ。

それで、一切れ食べてみると、なかなかおいしい。

そのとき、ふっとひらめいた。これをA君に課したら――。

一人ではだめだ。勢いが出ない。友だちと一緒にいけない。

そうだ。クラス全員の「宿題」にしよう。

● A君、動き始める！

宿題は、月曜日に出した。

A君は、早くも月曜日に試食に出かけた。母をひっぱり出して――。

今日は、お母さんと、「ししょく」のべんきょうにいきました。

やってみました。やってみました。

れいとうしょく品のところで、コロッケみたいなのを、うっていました。

1きれもらって食べてみたら、おいしかったので、お母さんにかけてもらいました。

うっている人にきいてみました。

「ここの人ですか？」

ときいたら、

「ちがうよ。アルバイトで、ここにきているんだよ」といいました。



ぼくは、てっきり、おみせの人だと思いました。

1はこ、500円のをかいました。

そしたら、また、1きれくれました。

ぼくは、おなかがすいていたので、とてもおいしかったです。

おなじ物でも、家で食べるより、あいうところでつまみぐいをするほうが、おいしく感じるのは、ふしぎだな。

それが、うる人のねらいかな

(2年 A)

ぼくが、いちばん好きなラーメンが、目の前にあって、ぼくは、よだれがでそうでした。

ぐるりとまわっただけで、おなかが、いっぱいになってしまいました。

お母さんは、

「はずかしいから、もうやめよう」といいました。

それで、おちゃのししょくをして、おわりにしました。



「ごちそうさま」 (2年 A)

食べるだけかと思ったら、「店の人ですか」なんて聞いている。

ちょっぴり、「それが、うる人のねらいかな」ということも、頭をかすめている。

わたしは、1週間しないと、わたしのねらうものが出てこないと予測していた。つまり、「なぜ試食などをさせるのか？」ということに気づくには、1週間くらい続けないとダメだと考えた。

●A君、本気で追究

今日も、デパートで、「ししょく」のべんきょうをしてきました。

スーパーマーケットとちがって、「ししょく」が、いっぱいありました。

パン、ステーキ、スープ、しゅうまい、ぎょうざ、やきそばなどがありました。

だけど、ラーメンだけは、いくらとおっても、くれませんでした。



それにしても、最後は、お茶の試食で「ごちそうさま」とは、よくできている。ユーモアもある。たのしんでいることがわかる。

A君は、スーパーマーケットを数軒、デパートも数軒まわっている。もちろん試食のためである。A君の試食に対する執念は、相当なものであることがうかがえる。

こういう動きをしているうちに、A君も、試食のねらいに気づき、コマーシャルや広告に注目するようになってくるはずである。急がないことである。十分に試食させることによって、そのねらいに気づかせるようにすることが、大切である。

性急にねらいに迫らせようとする、必ず失敗する。

そして後日、A君は、ついに「裏方の仕事」にまで気づいたのである。驚くべきスピードで、次々と新しいことを追究するようになった。「試食」の教材化は大成功であった。

「試食が宿題」なんて、さすがは有田先生。一石二鳥、三鳥のこんな「宿題」なら、子どもたちも大喜び。でも、保護者や同僚の先生方の信頼があればこそですね。